

川崎病の長期フォローアップ，予後について

大国真彦，唐澤賢祐，住友直方，原田研介

要約：2年以上経過した川崎病既往児の長期フォローアップ，予後について経過観察された273例に対して検討した。急性期に冠動脈障害を認めなかった例および軽度の拡大性病変の例で遠隔期に問題があったものはいなかった。また，冠動脈瘤，拡大の消退が認められた例の90％は1年以内に消退を認めた。冠動脈瘤を認めた49例中，狭窄または閉塞に進行した例は24％であった。

見出し語：川崎病，フォローアップ，予後

【はじめに】川崎病はガンマグロブリン大量療法の普及により冠動脈障害の頻度は少なくなっているが，冠動脈障害のない例も含め川崎病既往児の管理，予後の検討は重要と考える。今回，我々は川崎病既往児の長期フォローアップ，予後について当院の過去の症例を検討したので報告する。

【対象及び方法】対象は発症から2年以上経過した川崎病既往児で1974年から1988年に発症した420例のうち外来カルテにより追跡可能であった273例である。急性期に冠動脈障害があったものが95例，ないものが178例(計273例)であり，急性期に冠動脈障害があった例はほとんどの症例が追跡できた。

方法は外来での経過観察による遠隔期の冠動脈障害の変化，観察期間について検討した。

【結果】図1は遠隔期の冠動脈障害について心エコー，心臓カテーテル検査により判定したものである。フォロー中断例などの遠隔期の冠動脈障害が不明であった11例を除く262例中，急性期に冠動脈瘤が認められたものが49例であった。そのうち47％は冠動脈瘤が消退し，また，瘤が残っている例が29％で，心筋梗塞例も含め狭窄，または閉塞した例は24％であった。また，急性期に冠動脈の軽度拡大性病変のみであった44例は，すべて遠隔期には消退した。急性期に冠動脈に異常のない169例で遠隔期に異常が認められた例はなかった。

図2は冠動脈病変が消退した例において外来での冠動脈拡大、瘤の消退判定の記載時期により消退時期を推定したもので、消退した症例すべてを100%として発症からの観察期間での冠動脈病変の割合をグラフ化した。発症後6カ月までに67%が消退し、1年間で90%の症例が消退した。

経過観察中に定期検診以外の理由で当科に来院した例の所見を以下に示す。ただし、感冒などの急性疾患、1例のみの所見は除外した。273例中30例で、気管支喘息8例、単純性肥満7例、熱性痙攣、てんかん6例、特発性胸痛5例、心室性期外収縮2例、関節痛2例であった。胸痛は精査により心筋虚血の所見はなく特発性胸痛と診断した。

図3は川崎病定期検診の最終受診時で主治医よりの今後の検診指示について冠動脈病変の有無により比較したものである。経過中、冠動脈病変のない例では27%、冠動脈瘤の消退例で10%において管理不要とした。また、来院せずフォロー中断になっている例が、冠動脈病変のない例では6%、冠動脈瘤の消退例で7%であった。残りの半数以上の例では1年毎、または就学時には検診をするように指示されていた。また、冠動脈瘤ありで経過観察が中断されたものは1例のみでアスピリンの怠業が多く、その後来院しなくなった例であった。

【考案】2年以上経過した川崎病既往児について過去14年間の当科の症例についてフォローアップ状況、予後について検討した。

遠隔期の冠動脈障害については、急性期に異常のなかった例、軽度の冠動脈拡大性病変の例では遠隔期に問題のあった例はなく予後は良好と考えられた。しかし、主治医が管理不要としたものは、

冠動脈病変のない例では27%、冠動脈瘤の消退例で10%だけであり、現状ではさらに長期的な観察は必要との考えが主流であった。

冠動脈瘤、拡大の消退が認められた例の90%は1年以内に消退しており、3年目に消退した2例は心臓カテーテル検査で消退と判定されたがそれ以前から消退していた可能性があると思われた。よって1年以上を経て消退が認められたような例では狭窄病変の有無を検索するため心臓カテーテル検査による検討が必要と思われた。

急性期に冠動脈瘤の認められた49例中12例が冠動脈狭窄および閉塞に進行し追跡患者の4.4%をしめていたが、追跡不能者を含めれば実際はさらに低い確率であると思われた。

経過観察中に川崎病の定期検診以外の理由で当科に来院した例を見ると、273例中30例と比率は低く川崎病既往児の特徴としては考えられないが、気管支喘息、単純性肥満、特発性胸痛などの心因性の関与がある疾患が多く、心理面でのフォローも重要と思われた。

急性期

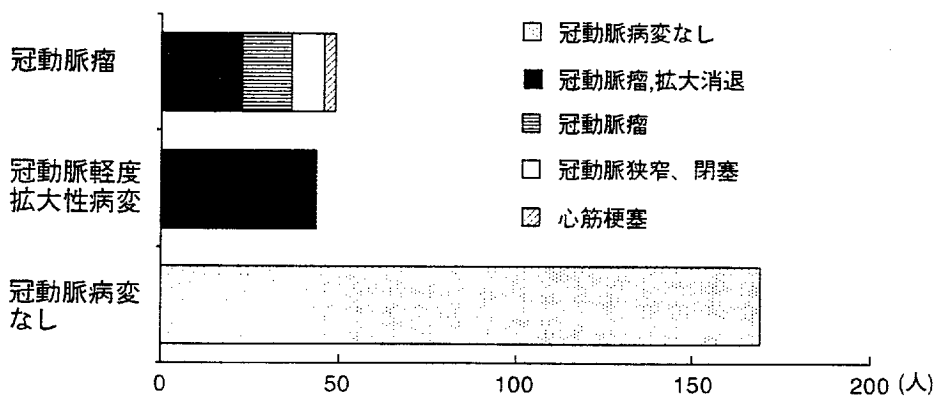


図1 遠隔期の冠動脈障害について

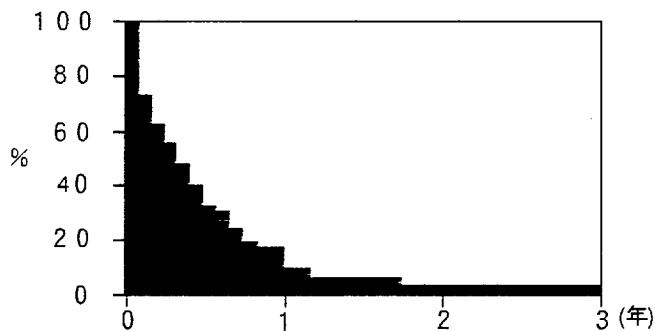


図2 冠動脈拡大, 瘤の消退時期について

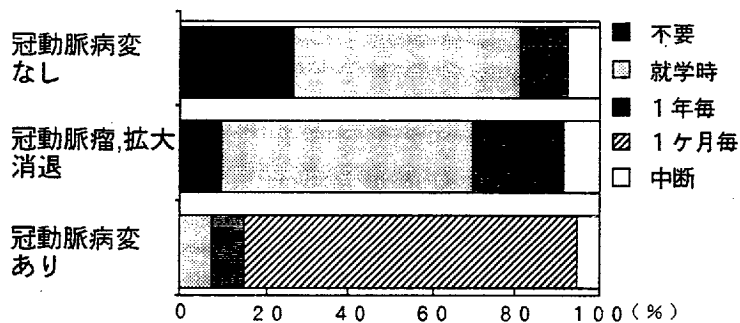


図3 最終外来での経過観察の指示について



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:2 年以上経過した川崎病既往児の長期フォローアップ, 予後について経過観察された 273 例に対して検討した。急性期に冠動脈障害を認めなかった例および軽度の拡大性病変の例で遠隔期に問題のあったものはいなかった。また, 冠動脈瘤, 拡大の消退が認められた例の 90%は 1 年以内に消退を認めた。冠動脈瘤を認めた 49 例中, 狭窄または閉塞に進行した例は 24%であった。